ねじめの長嶋茂雄日記

ねじめ正一

東京新聞出版局

ねじめの長嶋茂雄日記

江苏工业学院图书馆
藏书章

ねじめ正一

東京新聞出版局

ねじめの長嶋茂雄日記

1997年3月24日　初版発行
1997年4月15日　第3刷発行

著　者　ねじめ正一
発行者　秋山　侃
発行所　東京新聞出版局
東京都港区港南2-3-13
中日新聞東京本社
振替口座 00150-0-5497
電話 03-3740-2674(直通)
FAX 03-3458-0689

印刷所　長苗印刷株式会社
製本所　大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
©1997 Shoichi Nejime　Printed in Japan
ISBN4-8083-0591-7 C0075

ねじめの長嶋茂雄日記／目次

I 長嶋茂雄賛歌 ―― 5
落合、石井、そして長嶋監督／6
明るい野球の天使／12
いざ長嶋キャンプ見参／15
マックが打った／26
キャンプの醍醐味／34
ミスターは指先が美しい／42
天使か神様か―長嶋茂雄監督論―／45
II 長嶋怪語録 ―― 53
III 長嶋さん追っかけ日記 ―― 59
一九八九年／60　九一年／69　九二年／75　九五年／82
九六年／85
IV ねじめのプロ野球観賞講座 ―― 87

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

V ねじめのプロ野球ウオッチング——123
一九八九年／124　九〇年／140　九一年／157　九二年／171
九三年／184　九四年／190　九五年／200　九六年／213
九七年／234

VI 我らG党—対談・鼎談——235
長嶋巨人の魅力／236
神がかりの長嶋野球／245

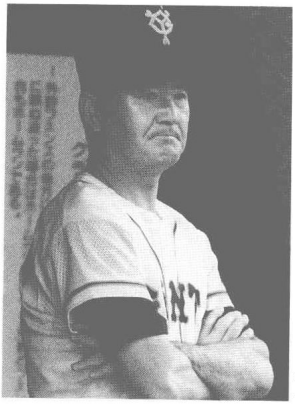
VII 我が草野球始末記——263
●データで見るミスター長嶋　横顔／292　引退あいさつ／293　公式戦成績／294
日本シリーズ成績／295　●巨人軍略年表／296
あとがき／299
初出一覧／301

写真／東京新聞写真部、著者のアルバムから

装丁／馬場　紅子
装画／原田アキオ

I

長嶋茂雄賛歌



私の神様、長嶋茂雄様

落合、石井、そして長嶋監督

メイクドラマと言えば、流行語大賞も獲った長嶋監督の言葉である。もちろん長島監督が考えに考え抜いた言葉ではなく、何かの拍子に思いついた長嶋語である。

一九九六年の巨人は、五月の終わり頃までは最悪であった。私もリーグ優勝は早々とあきらめた。いや、優勝どころでない。第一期長嶋監督時代と同じように突如長嶋さんが解任されて、元西武監督の森さんが就任するのではないかと思ったほどであった。

ああ、それなのに、長嶋監督は11・5ゲーム差をひっくり返して、見事セ・リーグ優勝を果たしてしまった。あれでもし巨人がオリックスを破って日本一になってしまっていたら、私は興奮のあまり血圧がぐぐぐぐぐぐぐっと上がり、脳溢血で倒れていたにちがいない。私の体を心配して、喜びをいっぺんに与えるよりも小出しにするところが、長嶋監督の粋な計らいである。

私はユニホームを着た長嶋さんをなるべく長く見ていたい。この願いが叶えつづけられるには、長嶋監督に優勝してもらうしかない。巨人の成績が悪いと、まちがいなく長嶋さんのユニホーム姿が見られなくなる。

第一期長嶋監督時代の解任劇で、プロ野球は企業のものであって、われわれプロ野球ファンのものではないことを知ってしまった以上、長嶋監督にいい成績を残してもらわないとダメなのである。

つまり私は、第一期長嶋監督時代の解任劇を目のあたりすることによって大人になったのだ。野球の神様だって企業の論理にはかなわないことを身にしみて知った。生まれて初めて世間の厳しさを教えてもらった。

私はとにかく長嶋監督の姿を一年でも長く見ていたい。だが、それは私の一方的な身勝手であることも知っている。いつかは長嶋さんだってグラウンドから姿を消すことになる。そして長嶋さんが辞めたあとの巨人軍の監督には落合選手になってほしかった。ほしかったと過去形で書かなければならないところが悲しい。

いや、私よりももっともっと、もっともっと長嶋さんの方が悲しかったにちがいない。長嶋さんも落合選手にはいずれ巨人軍の監督になってほしかったと思う。

落合選手ほど野球を知っている人は皆無である。長嶋監督はそれを知っていたし、知っていたからこそ、非難ごうごうの中、落合選手を連れてきたのである。

だから、私にとって落合選手の日本ハム入りはかなりショックだった。

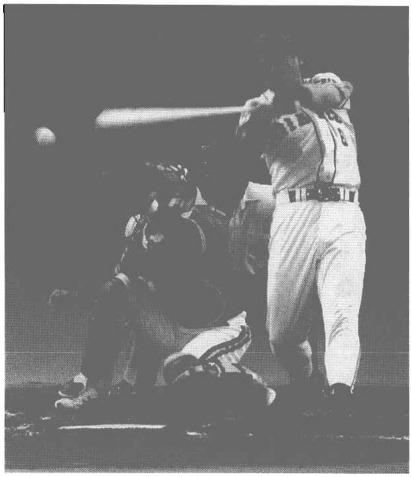
この際だからはっきりと言わせてもらうが、私は落合選手は去年の日本シリーズが終わった時点で引退すると思っていた。日本シリーズ第五戦の七回表、落合選手が最後のチャンスよろしく打ったものの一塁フライを打ち上げた瞬間に落合選手の引き際を見た。

いや、そうでなく、もっとはっきり言わせてもらえれば、落合選手が一塁フライを上げたときの長嶋

監督の顔つきを見た瞬間に、落合選手の引き際を見たのである。

そのときの長嶋監督の顔つきは、チャンスをつぶした口惜しい顔つきではなく、「落合、お前のようなすごい選手にも〝終わり〟がやってきたんだなあ」という顔つきだった。目先の日本シリーズよりさらに大きなドラマの終幕に立ち会ったという顔つきだった。

その証拠に、長嶋監督は日本シリーズに負けてもさばさばしていた。あのさばさばは「今年のセ・リーグ優勝だけでもよかった」といった低い次元からきているのではない。落合選手の最後を自分の目で見届けることができたという、感慨と納得からきているのである。



'96年の日本シリーズ第1戦で1回、中前に先制タイムリーを放った落合だったが……

落合選手はタイプこそ現役時代の長嶋さんとはまるで違うが、存在感としては唯一長嶋さんと並ぶことのできた選手だった。何よりも長嶋さん自身がそう認めていた。巨星墜つ、という言葉がある。バッターボックスの巨星が墜ちる瞬間を、ベンチにいるもう一人の巨星は見た。

そして納得した。私は長嶋監督の顔つきからそれを知って、落合選手の現役引退を予感したのである。

というわけで、私は当然のごとく、次期の巨人軍の打撃コーチは落合選手だと思い込んでいた。ところが、いつになっても落合選手の口から引退の二文字が出てこない。代わりに出てきたのは引退の二文

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

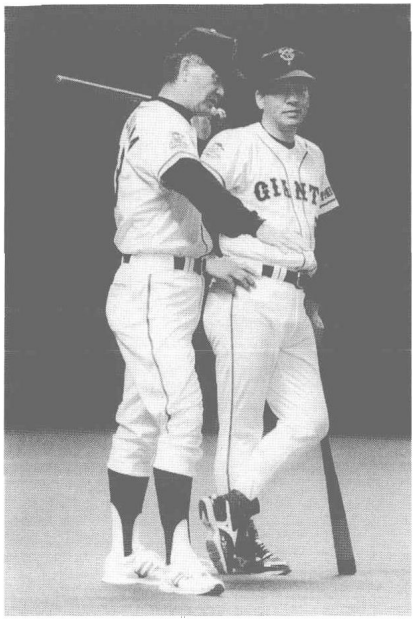
字ではなく、自由契約の四文字であった。

落合選手は引退したくなかったのだ。現役にこだわりたかったのだ。日本シリーズのここいちばんのチャンスでこそ打てなかったが、もう一度体調をきちっと整えて出直せば、まだまだ野球ができると思ったのだ。そして落合選手は日本ハムに入った。

落合選手は巨人の持っているファミリー感覚が好きではない。野球ができればどこにでも行くというのがモットーである。孤独に野球に向き合ってきたし、孤独そのものが好きなのである。野球の厳しさ、野球の面白さを誰よりも知っている。

彼の著書『勝負の方程式』は、人生の比喩にせずに野球の機微をきちっと書くことができた、たぐい稀なる本である。この本を読むと、落合選手が現役にこだわる理由が、巷間言われているような金のためなんかではないことがよくわかる。

こうなったからには、落合選手には、日本シリーズ第五戦での長嶋監督のあの顔つきを否定できるほど、がんがん活躍してほしい。それもまた、九七年の大きな「メイクドラマ」にちがいないからだ。



練習の合間に、落合選手(右)とバッティング談議をしていた長嶋監督だったが…

九七年のメイクドラマの主役を予感させる選手としては、もう一人、近鉄から巨人に移籍した石井浩郎選手がいる。

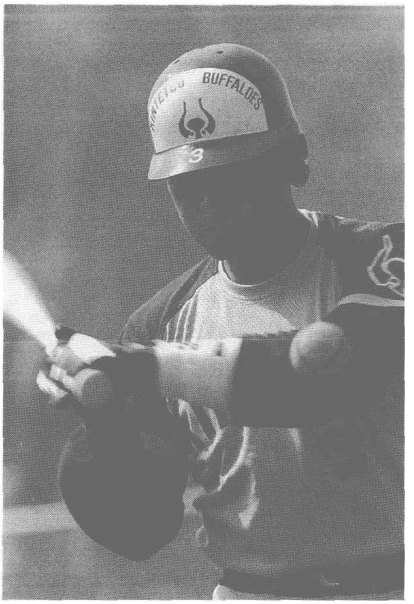
石井の巨人入りが決まったときは、正直言って清原入団よりもうれしかった。ひょっとしたら夢ではないかと心配になり、私の出気味の腹の肉を何度もつねったぐらいだ。

石井の打撃を初めてじっくり見たのは三年前の宮崎球場、巨人のオープン戦第一戦であった。相手チームは近鉄、そのときの石井のフリーバッティングを見てぶったまげたものである。

なにしろ、レフト、センター、ライトと順番に打ち分けるようにホームランを飛ばすのだ。打球は、速さも伸びも松井以上で、バットでボールを叩く音が他の選手とぜんぜん違っていた。

いやはや、あまりにすごい石井のバッティングに、巨人の選手はしばし茫然と眺めていた。村田捕手なんぞは、フリーバッティングを終えた石井に向かって「あんまり打つとぶつけるぞ」と冗談を飛ばしていたし、長嶋監督もにっこり微笑みながら石井の打った球の行方を追っていた。石井のバッティングには、敵チームも味方チームも見惚れてしまうのである。

ちょっと寝かし気味の構えから振り抜くスイングは、ちょっと神主さんのお祓いに似ている。バック



鋭い目でボールをとらえる石井

巨人に入団、長嶋監督に帽子をかぶせてもらう石井選手

ネット裏で見ていた私も思わず石井にうっとりしながら、「ああ、石井が巨人にいてくれたらなあ」と何度もため息をついたものだ。

石井は打撃だけでなく、三塁守備もなかなかのものである。前の動きは体重が増えたのでちょっと不安があるが、横の動きには派手さがあるし、送球までにスリルがあって目が離せない。

石井を獲った長嶋監督のことを「何でも欲しい、欲しいの人」などと揶揄する向きもあるが、私は一向に平気だ。長嶋監督は他チームをなめていない。

広島、中日、ヤクルトの強さを認めているからこそ、石井を獲ったのである。いやいや、そんなことより、長嶋監督は石井のバッティングや石井の守備を毎日でも見たくて、石井を獲ったのかもしれない。

私はそういう長嶋監督が好きである。落合選手の引き際をあのような顔つきで表現して見せた長嶋監督は、石井のプレーの素晴らしさも、長嶋監督独特のやり方で表現してくれるにちがいないからである。

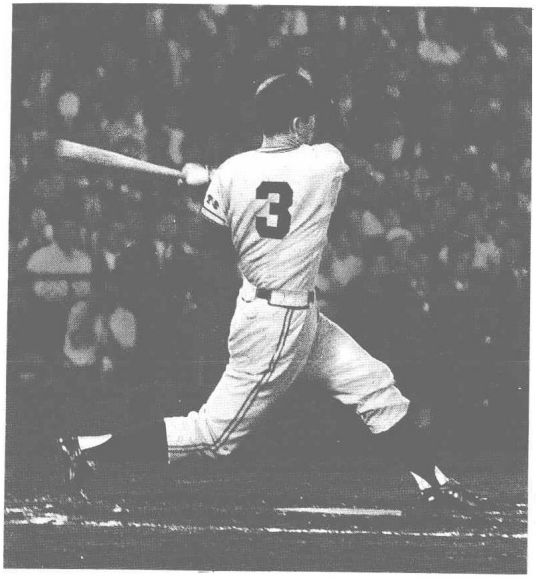
明るい野球の天使

私は誓っていうが、昭和三十年代に東京の中央線沿線で生まれ育った少年は誰でも巨人軍には特別な思いを持っている。母親が名古屋の生まれでも、父親が熱狂的な阪神ファンでも、息子の心の奥底に宿る唯一の球団は巨人軍だったはずである。

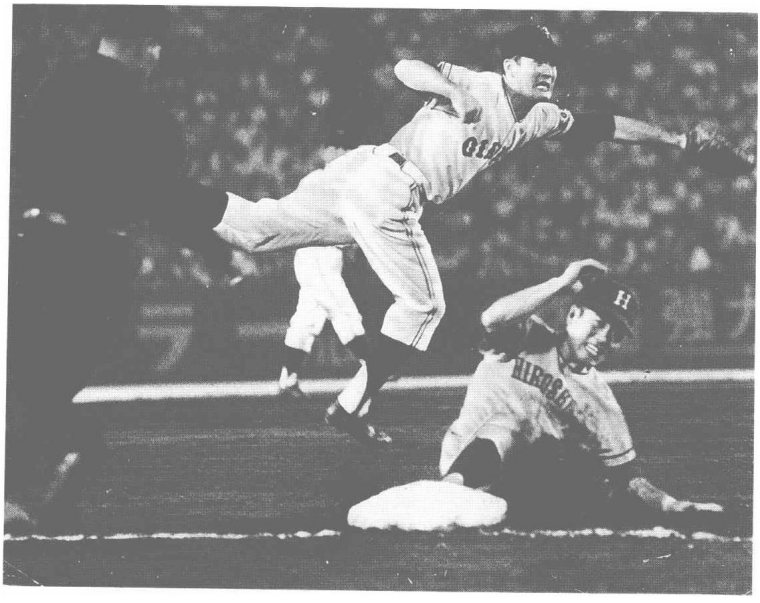
理由は簡単だ。中央線の町と後楽園のある水道橋とは、線路でまっすぐにつながっているからだ。まことに線路は、へその緒みたいに簡単にハサミで切れるものではなく、少年と巨人軍とを鉄の強さで結びつけている。母親の胎内にいるうちから線路づたいの後楽園球場のどよめきを聞いているので、巨人軍に特別の感情を抱くのは当たり前なのである。

私もそういう少年の一人だった。高円寺駅のホーム下に下り電車がくれば、この電車は後楽園球場の空を揺るがすあの大歓声を浴びてきたのだと思う。上り電車がホームに入ると、この電車に乗りさえすれば後楽園球場に行けるのだと思う。思いが昂じると踏み切りを越えて、線路に耳をあてたこともあった。昔の中央線はいまみたいに高架でなかったから、そんなこともできたのだ。

――そして長嶋茂雄がきた。野球の神様がもっとも愛した野球の天使、長嶋茂雄が、一九五八年(昭和



ファンを魅了した新人の頃の長嶋茂雄選手の豪快なバッティング（上）とフィールディング（下）



三十三年）四月五日に後楽園球場に舞い降りてきて、金田の投げるボールに全然かすらず、四打席連続三振してもワルツを踊っているように見えたし、三振してベンチに戻っていくときも楽しくてスキップを踏んでいるように見えた。

こんなに明るい選手を見たのは初めてだった。それ以来、巨人＝長嶋茂雄になった。野球の天使、長嶋茂雄がグラウンドで羽ばたけば羽ばたくほど中央線の線路はいっそう輝きをまして、線路を伝わってくるどよめきはいっそう高くなって、中央線の少年はただただ長嶋に焦がれ、鉄条網を張った空き地の中でケガなんか恐れずに少しでも長嶋に近づこうと思って、長嶋茂雄の真似をした。

膝をつきながらウエーティングサークルでじっと待っている長嶋の真似、バッターボックスの足元の土をならす長嶋の真似、ユニホームの右襟を右手でちょいとつまんでからバットを構える長嶋の真似、指先をしっかり伸ばして走る長嶋の真似、大きく両手を上げながらスライディングする長嶋の真似などを毎日毎日夢中でやった。

中央線の線路もそのままの強さとまっすぐさで巨人軍に結びついたのが、中央線の少年ばかりでなかったのを知ったのは、ずっと後のことだ。どこに行っても巨人ファンの少年、元少年たちはいた。巨人の話をすると目が輝き、長嶋茂雄の話をするとうれしくてうれしくてたまらない顔になる人たちだ。

え？　そりゃ電波のせいだって？

地方では巨人の試合しか放映しないからだって？　とんでもない。巨人軍は十二球団でただ一つ、野球の天使が舞い降りてきた球団だからだ。永久に、永遠に不滅ですと、野球の天使が保証してくれた球団だから、今年は東京ドームに45試合応援にかけつけるのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com